



長倉三郎先生を偲んで

Eiji HIROTA 廣田榮治 総合研究大学院大学元学長

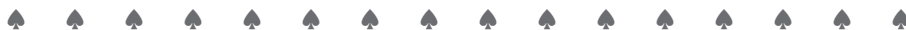
「分子科学」(molecular science)という言葉がまだ世界中になかったころ、長倉先生は、森野米三、赤松秀雄などの諸先生とともに、「分子」を中心課題とした未知の研究領域を模索され、その創成を先導的に推進された。分子科学研究所が、大学共同利用機関の1つとして日の目を見たのは、このような長倉先生方の超人的なご努力の賜物である。当時学問は、学部、学科といった大学等での従来の枠組みを超え始めており、長倉先生方は、そのような動向をいち早く的確に把握し、新領域での研究活動が一層広く深く活発に展開されるよう備えられたのである。正鵠を得た判断で、今日に至る分子科学研究所などでの素晴らしい研究成果に如実に顕示されている。その発展はとどまる所を知らない。

共同利用研は、少なくない数の傑出した研究者が、将来性のある興味深い研究課題について顕著な成果を挙げ始めている分野の中から、さらに厳しい選抜を経て選び出した領域に設置されてきた。多くの場合、その期待を裏切らない成功を収めている。これらの研究所群をさらに総括的に運営するという責務は、主として所長懇談会が担ってきた。重要な意見交換の場である。長倉先生はこの所長懇談会でも座長を務められリーダーシップを発揮された。懇談会の重要課題の1つに、個々の研究所がカバーする活動領域の境界がある。特定の分野に設置された研究所である、自ずと関

係する領域には制限がある。所長懇では、長倉先生のリーダーシップのもと、この境界の存立について討議が重ねられた。この問題と同時に取り上げられたのが若手の育成である。共同利用研に大学院学生はいかに関わるべきかという、高等教育と基盤研究に関する根源的問題である。

ここでも長倉先生は所長懇を中心とした討議を指導された。特定の分野ごとに設立されている大学共同利用機関の本質を十分に踏まえながら、当該分野だけに孤立することを避け関連領域との連携・協力・発展を図る、と同時に広く深い視野・素養・力量を備えた若手研究者を育成するという新しい仕組みを創造された、総合研究大学院大学(総研大)である。我が国最初の大学院だけの大学である。大学全体の優れた施設・設備は基盤となる共同利用研にあり、学生はそれぞれが属する基盤機関で教育研究を受ける、と同時に総研大全体のプログラムを通じて随時交流しながら幅広い教育を受け、独創的研究に従事する。基盤機関に立脚した特異なもので、学生は多種多彩なコースを取ることができる。世の中では長年教育・研究に「文理融合」が重要と指摘されてきたが、共同利用機関は総研大の仕組みによりこの面でも意欲的な活動を開始している。長倉先生は総研大初代の学長として、この課題でも強力なリーダーシップをとられた。

© 2021 The Chemical Society of Japan



写真館
長倉先生



総合研究大学院大学(葉山)での講演(2004年5月17日)。(提供: 総合研究大学院大学)



総合研究大学院大学(葉山キャンパス)。(提供: 総合研究大学院大学)